能開通信
増刊号

2025年度入試

「総代対談」

上村 綾美 さん
東京大学 理科三類合格　東京大学入学式総代

×

色川　翔 君
新潟高校理数科合格　新潟高校入学式総代

能開センター新潟本部

WAO!
Education & Entertainment
ワオ・コーポレーション

能開センター新潟本部［各校舎一覧］

- 能開センター新潟校
- 能開センター女池校
- 能開センター青山校
- 能開センター白山駅前校（大学受験）
- 個別指導Axis（アクシス）新潟校
- 個別指導Axis（アクシス）白山駅前校
- 個別指導Axis（アクシス）新潟駅南口校
- 個別指導Axis（アクシス）女池校
- 個別指導Axis（アクシス）東新潟校
- 個別指導Axis（アクシス）寺尾前通校
- 個別指導Axis（アクシス）小針中央校
- 個別指導Axis（アクシス）青山校
- 個別指導Axis（アクシス）新潟大学前校
- 個別指導Axis（アクシス）黒埼校

2025 年度，能開センターの 2 名（上村綾美さん 東京大学理科三類合格 東京大学入学式総代，色川翔君 新潟高校理数科合格 新潟高校入学式総代）が“入学式総代”を務めました。

この度，その 2 名の「総代対談」が実現。『能開通信 増刊号』として，対談の模様をお伝えします。

以下，上村さんは“上”，色川君は“色”と略して表記させていただきます。

なお，聞き手は，能開センター新潟校 仁村（略記“仁” 小中学部で 2 人を担当），能開センター白山駅前校 佐野（略記“佐” 高校部で 2 人を担当）が務めます。

参加者プロフィール

上村 綾美 さん

白新中学校 ⇒ 新潟高等学校理数科 ⇒ 東京大学理科三類

中学 1 年生から能開センター新潟校に入会し，中学卒業まで在籍。

高校 1 年生から高校卒業まで能開センター白山駅前校に在籍。

色川 翔 君

紫竹山小学校 ⇒ 附属新潟中学校 ⇒ 新潟高等学校理数科

小学 5 年生から能開センター新潟校に入会し，中学卒業まで在籍。

高校 1 年生から能開センター白山駅前校に在籍中。

仁村 信哉

能開センター新潟校責任者。全国最難関中学・高校受験を担当。

上村さんを中学 1 年生から 3 年間，色川君を中学 2 年生から 2 年間数学を担当。

佐野 雅人

20 年以上に渡り，能開センター高校部にて，最難関大クラス・難関大クラス・国公立医学部医学科の数学を担当。

上村さんの数学を 3 年間担当し，現在色川君の数学を担当。

佐：断れるような状況なの？

上：私は断れないですし、断るつもりもなかったんで引き受けたんですけど、断る人もいるみたいです。候補に挙がったのは女子ばかりだったらしいです。

佐：女性にしたかったのかな…？

上：そうらしいです。去年も女子で、その前男子だったみたいですけど。

佐：色川君は？

色：僕は合格者オリエンテーションの時に、教室戻ってきたら教室の外に呼ばれて、「入学式で挨拶してくれませんか」みたいに言われました。

佐：色々と条件は付けられるの？「何分間ぐらい」「何文字ぐらい」「こんな内容で」とか…。

上：例年の過去3年分のデータを渡されて、「大体これぐらいの長さ（千文字から二千文字ぐらい）で」「内容はあなたに任せるんだけど、1年生らしくフレッシュな感じで」ってことだけは言われました。

佐：それをチェックされて？

上：何回か色んな人がチェックしてくれて、という感じでした。

佐：当日はリハをして？

上：そうですね。

佐：自己評価は？

上：まあ悪くないかなと思ってますし、別にやらなきゃよかったなとは思ってないんですけど、夏の集中講義でAIについても学んだら、「今、第4次人工知能ブームがもう来てる」みたいな話があって、「私が第3次って言っちゃったから、乗り遅れてるかな」と、ちょっと気まずいかなと思いました。

佐：色川君には、何かあった？「制限」とか「こんなことを話してください」とか。

色：僕の場合は、過去何年分かを渡されて、紙に「ここに収まる範囲で書いてください」って感じでした。去年のものを参考にしつつ、下書きを書いて、担当の先生に見せて、ちょっと修正が入ったって感じです。直接字数とか内容指定はされてはいないけど、例年のものをある程度参考にしてという感じでした。

佐：リハーサルはあったの？

『総代』

佐：総代選出おめでとうございました！

上・色：ありがとうございます。

佐：どんな風に伝えられたの？

上：私は合格発表から4日後の朝に電話がかかってきて、最初は何か〈入学手続き〉をミスって、怒られるんだと思ったんですけど、それが「新入生総代の挨拶をしてもらえませんか」っていう電話でした。

色：当日、早めに行ってリハーサルをしました。

佐：自己評価は？

色：まあ、上出来だったんじゃないですか…。

佐：周囲の反応はどうだった？

上：家族には「あんたらしいね」と言われました。大学でできた友達には言ってなかったので、「はぁ…？ あんた何してんの…？」みたいに言われて…。〈新入生総代〉の名前を見た時に「夢見てるかと思った…」とか言われました。でも、初めて会う人たちも私の顔を見て、「あ、総代の人でしょ？」みたいに、スタートがプラスから始まるから、よかったです。

色：それ結構分かります。部活とかでも、最初その話題から入るから話しやすかった。あと、周りの友達は「良かったよ」みたいな感じでした。

佐：じゃあ、やって損はないと？

色：はい。そうですね。

佐：変な話、お礼とかあるの？

色：ないです…。

上：でも、「学長と握手ができるなんて…！」みたいなことを周りから言われて、「ああ、それが、謝礼なのかな」と…。あと、学部長と1回お話ができるっていうのが名誉だということになっているらしいです。

『志望校』

佐：いつ頃決めました？「新潟高校にしよう」「東大理三にしよう」って。

色：新潟高校は、県外に出ようって発想があんまりなかったので、「県内かな」ってなった時、一番レベル高いとこでって感じでした。

佐：周りには、結構「県外」っていう声もあった？

色：なんか僕たちの学年そんなに県外行く人いなくて、それもあって県内にしました。

佐：上村さんは県外の高校への選択肢はなかった？

上：コロナの時で、私は県外受けたかったんですけど、「多分受かっても行かないのに、いわゆる〈勲章取り〉みたいなことをするのはどうなの？」っていう風に親にも言われて…。喧嘩したあげく「じゃ、いいよ！」って。

仁：この年は、県外の高校を受験するってことを、叩かれるっていう雰囲気が強かった…。

上：入試のためだけに外に出るの？ みたいな。

佐：ああ…なるほど…。

仁：みんな受けづらい年だったんだよね…。途中で諦めたのは上村さんだけじゃなく、結構いた。

上：多分、県外受験できたとしても、家のことを考えると、どっちにしろ県内になったとは思うし、能開のみんなも「県内にするか」って言ってたし、私は中学がみんなと違ったから「高校で一緒になれたらいいな」くらいの、結構ライトな感じで志望しました。

佐：じゃあ「もう新潟高校だ」って決めたのは、そんなに早い時期からではないと？

色：はい。もう中3になったぐらいですね、多分。

佐：そこまではあんまり「どの高校」とかって、強い意識があったわけではない？

色：はい。

佐：上村さんは決定早かった？

上：あんまり考えた記憶がなくて…。中3になって、「最難関いつまでやるの？ 公立高対策の方に移るの？」ってなった時、考えなきゃいけなくなって。志望校の最終決定について書くみたいなのがあったんですけど、その段階でやっと、ちゃんと親とも話し合ってって感じでした。

佐：周囲のみんな、そんな感じ？

仁：最終決定はそれぐらいの時だとは思うんですけど、2人はちょっと事情が違いますね。

色川君はサッカーを頑張りたいっていうのが強かったので、その高校入試とか受験勉強っていうよりは勉強もやりつつだけど、サッカーも頑張りたいっていうので、なんか「入試」とか「高校」ってのはあんまり会話に出てこなかったような印象がありますね。

上村さんは、「受験に向けて」というより、「問題への探求」っていうイメージの方が強くて、知らないこととか分からないことを友達同士や自分で調べたりしているっていう姿が印象に残っていて、どちらもあんまり高校入試というものに関しては、あまり意識していないようにも見えましたね…。

色川君は、こちらが特に誘導しなくても、「必要ならやるし、必要なければやらないし」みたいな感じで、上村さんは、もう単純に知らないことを知っていくってのが目的で、それが高校入試に出る出ないとかじゃなく、知りたいことや分からないことを知っていこうっていう意識が強かった印象がありますね。

佐：そんな上村さんが理三に決めたのは？

上：まず高1の時に「学校の勉強がちょっとぬるいんじゃないか」っていう風に、親も感じてたみたいで、「このままだと、何でもいいって思ってしまうんじゃないの…？」みたいに言われたので、能開を続けながら、ある予備校の映像講座での予習もやってたんですけど、それも「あんまり早くないな…」と感じて…。

その塾は、塾生だと1、2年生の時は模試を無料で受けられるから、親から「夏の東大模試を受けてみて、打ちのめされてみたらいいんじゃない？」みたいに提案されて、受けてみたんですが、数学はまずまずで、英語もまあまあ得意だったんで結構できて、国語も悪くなかった。理科は生物を解いて、意外とできそうって感じ。

それで、決して天上人じゃないと解けないような入試じゃなく、「がっつり取り組めば行けるやつなんだ…」みたいに思って、それからずっと、「とりあえず志望が決まるまでは〈理三〉って書いておこう」みたいになっていました。

が、高2後半ぐらいから受験生として本気で模試に取り組むようになると、判定もあんまり良くないし、「すごい数学ができる！」って感じでもなかったから、あまり深く考えず、点数が足りないから理三を受けるのはやめたいみたいに思っちゃって。そこから、他学部や他大学のことも色々考えました。そんな私の姿を見て、親はそれで結構困ってたみたいなんですけど…。

で、最後の高校での三者面談でも揉めて、時間を優にオーバーして…。昨日母に聞いたんですけど、私は記憶がないんですが、共通テスト一週間前ぐらいに、私が「これは私が戦わないといけないことだから。自分で決着をつけないといけないから、理三を受ける」って言ったらしいです。「医学をやりたい」って気持ちがあるのに、点数が足りないからという理由でやめるのは、自分の中で嫌だったので、共通テスト一週間前に最終的に決めたらしいです。

佐：共テ一週間前、そんな感じだったよね。

上：白山駅前校行くたびに毎回なんか言ってましたよね。「どうしよう、どうしよう」って。

佐：どうですか？ 今、聞いて。

色：これからの未来が見えない中で、最初から一番高いレベル目指すっていうのは、なんかすごいな…と。

佐：石橋を叩いて渡る派なの？

色：いや…、必要なところに石橋を作るって感じですかね。行きたいところであれば、細い石橋であっても、まあ、渡れればいいか…みたいな。

佐：なるほどね。もう、当たって砕ける。

上：もう決めたら、まあ「橋がなかったら泳ぐか」ぐらいの勢いで。石橋とか作ってる暇は、いつもあるとは限らないし。もう落ちても泳いで渡るしかない…みたいな。

佐：でも、それぐらいの覚悟がないと理三なんて受験できないよね…。

上：はい…最後は、受けるか受けないかでずっと…。

佐：まあ、100名だからね…。自信もって理三を受けてる人なんて一握りだよな…。

上：そうですね。冠模試（東大模試や京大模試という風に特定の大学名のついた模擬試験）で、ずっとA判定みたいな人は覚悟を決めるのも早いと思うけど、普通の人たち、特に地方の人たちは「結構迷った…」とか「一浪は覚悟してた…」とか言ってました。

佐：石橋を叩いて渡る派の人たちをちょっと安心させてほしいんだけど、完璧に解く必要はないんだよね？

上：はい。当然、満点なんて基本取れなくて、いかに取れる点数をもぎ取るか…みたいな感じですね。重要なのは、いかに「私はこの問題の本質を分かってます！」っていうのを採点官にアピールするかだから、完答を本当は目指すべきなんですけど、完答できなくても受かる時は受かるらしいです。

佐：440点満点だよね？ 大体350、60で安心？

※ 東京大学理科三類の入試配点は、共通テストは1000点を110点に圧縮し、個別試験（2次試験）は、国80点、数120点、理科（2科目計）120点、英120点の計440点です。

上：今年はちょっと最低点低くて268で、たまに危ない年もあるけど、基本は300点を目指せ！らしいです。

色：やったことないから、実感が湧かない…。

佐：確かに。でも、「立ち向かおう！」っていう意識がないと無理だよね、多分。

上：そうですね。それは、受験一般に共通している

ことなのかなと思います。うん。

『新生活』

佐：これからどうなっていくか、楽しみですね。
よし、じゃあ話題を変えて、入学後約5ヶ月、新生活には慣れましたか？

色：慣れたっていう感覚はあまりないですが、友達はできたし、授業の内容も理解できないところはあまりなく、まあ大丈夫なんですけど…。部活も楽しいですし。ただ、中学と違って、予習と復習をちゃんとやらなきゃいけないのを、あんまりできてないし、提出物関係もちょっと危ないし…、出してないやつもあるし…で。ちょっとそっちが危ないかな…って感じです。

佐：部活は勉強の足を引っ張るほどではない？

色：やっぱり時間は作れなくなるんで、その点は結構痛いんですけど、ついていけなくなるまでは、まあ頑張ろうかなと。

佐：提出物を出さないとかっていうのはどこら辺に関わってくるの？

上：私も提出物、張れてなかったんで…。

佐：出してないのもある？

上：ありました…。

仁：出さないとなんかまずいことはあるの…？

上：別になかったような…。テストでできなくなったら自己責任だし、提出物を出す出さないでテストの点数が…ってことも特にないですから。

佐：テストでできれば特に問題なし…？

上：ないんじゃないでしょうか。私の時は、そもそもそんなに提出を急かす先生は多くなかったですけど、何人か「ちゃんと提出しなさい！」って先生はいるから、その先生にさえ怒られなければ…って感じですかね。

※この後、しばらくここには載せられないような、高校の先生についての2人の会話が続き…

少し〈閑話〉

『白山駅前校の英語の先生に染まる…』

しばらく、高校の英語の先生の話題で2人は盛り上がり…

佐：やっぱり白山駅前校の英語の先生（以下、H先生）色ってのは浸透するもの？

上：これからどんどんもっと染み込んでいくと思いますよ。

佐：染み込んできた？

上：東大・京大・難関大医学部クラスってことで、人数が絞られていくことによって、残る人がより濃く（？）なっていく感じ…。
高校では、あまり文法の説明をしてくださらない先生もいらっしゃって、ただ、そういった先生は内容説明とかがすごく面白いんですけど、その先生の授業が終わった後に「いや、これ絶対〈間接疑問〉じゃん」とかって、そのプリント教材を持ち寄って、あまり文法事項に触れられなかったその教材に対して、能開生5人ぐらいでコソコソやるっていうのが楽しかったですね。H先生の授業を受講してなくても文法が好きな子とかもいるから、その子たちが持ってくる教材を一緒に見て、「いや、これは否定だから」とか「これは比較で」とか言ってたのが記憶に残ってますね。

佐：徹底的に文法を叩き込まれる？

上：それはもう、先生ご存知の通り。

佐：性に合ってた？

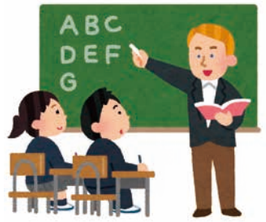
色：はい。そうですね。本当に必要な文法の全体像を教えてくれる感じなんで。はい。

佐：東大の英語とかにも直結する感じ？

上：受験英語っていうか、英語全般の素養がいい感じになってくると、受験英語は超えるべき大きな壁というよりは、自分がその3年間H先生から学んだことをちゃんとアウトプットできるかどうかでしかなくなるので。

色：今まで、「これって入試で使えんのかな…」と思いながら授業を受けていたので、今の話、聞けて良かったです。

上：この後、演習になって、H先生の準備されてくる昔の古き良き受験問題を解いて、「な？ 解けるようになってるだろ？」みたいになっていくよ。



〈閑話休題〉『新生活』

佐：じゃあ、そろそろ話を元に戻して。一人暮らしはどうですか？

上：いや…ちょっと駄目かもしれないです。

佐：何が駄目なの？

上：すべきではなかったと思って。

佐：でも、一人暮らししないことには…。

上：はい…そうなんですけど…。
「新潟で生まれて東京に出るって、こういうことなのか…」と、しみじみと感じてます。

佐：5ヶ月じゃ慣れない？

上：大学生活や友達関係とかはいいんですけど、一人で暮らす部分がずっとやばくて…。もう、その毎月周期的に「私なんでここにいるんだろう」「なんでこの部屋にいるんだろう」みたいな、「なんで私はここに一人なんだろう」っていう時期が絶対に来ます…。洗濯とかじゃなくて、部屋にコロコロをかけるとか、ベッドメイキングをするとか、そういう細かいところで神経がすり減って…みたいな。

佐：そうなの…？

上：「授業の合間に何かしなきゃ」とか「オンライン授業の合間の時間には洗濯をしなきゃ」みたいな、生活がままならないというか…。今まで何もしてなかったから…。でも、私だけじゃなくて、結構みんな言ってますよ。

佐：5ヶ月じゃ慣れないか…。

上：と思うんですけどね…私は。

佐：一人暮らしはしたい？

色：やってみたいなとは思ってますね。

佐：意外とやれそうだよね。

色：意外とやれるんじゃないですか。

佐：料理とかちゃんとしそうな感じがする。

色：料理はやってみたいな、と。一人暮らしだったらやってみたいなと思ってます。

今年の夏休みに、家庭科の課題のホームプロジェクトというやつで、「家庭的なことを何かやってみよう」みたいなのがあって、それで料理みたいなのを作ったりしたんで。作れるっちゃ作れるんですけど、毎日とかになると、やる気がなくなって、本当に最低限しかやらないような気もします…。

佐：なんかアドバイスは？

上：カレッジコートとかドーミーみたいな、ご飯がついてくるところに住んだ方がいいですね。

私はご飯ついてるところに住んでるんですけど、朝食を食べに行ってると、1限に間に合わないし、夕食もサークルや部活に行ってると食べれないとかがあるから、あまり意味はないんですが。でも、一応「頑張って帰ればご飯がある」って環境を確保しといた方がいいですね。そうしないと面倒くさくなって食べなくなっちゃうかもしれません。友達に監視してもらうとか、「ちゃんとご飯食べた？」って毎朝聞いてもらうとか…。

佐：やっぱり、生活や食事は不規則になる？

上：普段の食事は大丈夫なんですけど、テスト前が本当にまずくて…。

『大学の（定期テスト）勉強』

上：テスト3週間前ぐらいから授業がなくなって、学校に来て勉強するか、家で勉強するかぐらいしか選択肢はなくて、そうすると、大学の図書館が8時に開くんですけど、それに合わせていかないと席が全部埋まっちゃうから、それまでに行って、夜10時ぐらいまで図書館で勉強して、家でまた勉強始めて、徹夜して…、みたいなのをぐるぐるぐるぐるやって、ご飯は気づいたときに食べるみたいな生活になるので、本当に体調が心配になります。普通に4徹（4日連続徹夜）ぐらいをみんなしてて…。「なんでこんなことになったんだ…」って感じになります。そんな生活を誰も止めてくれないし…。

佐：高校のテスト前の勉強とはもう世界が違う？

上：高校の授業って、分からないこととかあんまりなかったんですが、大学の授業は、そもそも先生の言ってることがみんなよく分からないまま、ひたすらメモするしかなくて、みんな後になって「え？ これ何言ってんの…？」みたいになって、「とりあえず過去問だけやろう」となるんです。

もう高校時代のものとは、全然理解度が違うから、ずっと不安。高校は「ま、いけるっしょ！」ってなる時が来るけど、大学はそれが来ないから。

そんな状況になってても、親が「もう寝なさい」って言ってくれることもないし、周りもみんな起きてるから、結局引きずられてどうにもならないんです…。

仁：勉強は今の方が大変なんだ？

上：普段の授業は全然大変じゃないし、大丈夫なんですけど、テスト勉強になると…。先生に質問にも行けないし、「なんだこれ？」みたいな問題を一生やらされてるような感覚になります。

佐：学校の先生とか塾の先生に質問するってものとは違うもんね…。

上：先生によって解き方とか公式の名前とかも違って、あんまり他の先生に聞くことができなくて、孤独な戦いを強いられるみたいな…。

佐：高校で頑張ってきた勉強って、全く役に立ってないってことはないと思うけど、あまり…？

上：長い時間勉強し続けるとか、数学の問題で、とりあえず「書けるとこまで書いてみる」みたいなことは高校時代と変わらないけど、授業をされている方が、個性・拘りが強い人たちだから、大変なんだと思います。

佐：いずれ、そういう世界にいくことになるけど、乗り切れそう？

色：東大の人たちでさえ、「どういうこと…？」ってなっちゃう世界ってことなんですよね…。無理っぽいです…。

仁：中学の時もさ、例えば数学で分からない問題があっても聞きには来なかったよね。仲間内で解決しちゃおう！ってタイプだったよね。高校も多分そんな感じなんだろうなと思うけど、大学もそういう感じ？

上：高校までは仲間の中に完全に理解してる人がいて、みんなで相談すれば何とかなったけど、大学になるとそういう人もいないから、「テストではどんな風に、何について聞かれるんですか？」みたいな質問を誰かが代表して教授にメールして、返信を待つみたいな質問はしてるけど、高校時代の「昼休みに先生のところに行って教えてもらう」みたいなのはないですね。

仁：メールすると教授の先生は返してくれる？

上：返してくれる先生もいます。2分とかで「聞いてくれてありがとね」みたいな返信を返してくれる教授もいるし、まったく返信がなくて「こりゃ駄目だ…」って諦めざるをえない場合もあります。

佐：科目・教科って、どんな感じなの？

専門はまだなんだよね？

上：そうですね。必修だけだと今は数学が【数理科学基礎】ってやつだったのが、最近【微分積分学】と【線形代数】に分れて、それらを同時並行でやってて、物理が今【力学】で、秋から【電磁気】に変わるのと、【化学熱力学】って気体の運動論とかをやるのがあったのと、化学は【基礎化学】っていう、化学全体を俯瞰してみようってやつを。

佐：高校でしっかりしてないと困る内容かな。

上：高校の先生方が発展って呼んで、あまり授業で扱わなかったこととか、資料集・便覧には書いてあるけど授業ではあまり出てこないやつとか、過去問でちょっと出るぐらいだなってやつが、大学では教科書に載ってるような当たり前のことになる、みたいな感じです。

『国語…』

読書は必要？ まんがじゃ駄目…？ 算数駄目でも理三に受かる!?

佐：聞けば聞くほど役立つことがありそうだ。小中学生向けになんかないかな？「こんなことやってこいよ」みたいな。「俺みたいになるには、こういうことをしてくれば」みたいな。まあ、能開で頑張ってれば大丈夫か…。

色：ま、そうですね。ただ、国語に関しては、なんか本当にどうやって伸ばしたらいいのか分からないですね…。

佐：国語、どんな風にやってた…？

色：国語自体、あんまりやってなかったです…。電話帳（全国の入試問題を集めたもの）をたまに解くぐらいで…。

佐：上村さんは？

上：電話帳は1周はしたと思うんですけど…。

佐：確かに国語の勉強のやり方はね…。大学入試にもあったよね、国語。どんな勉強を？

上：古文・漢文はやるしかないから、1年生から文法・単語はしっかりやってて、現代文は、学校の【論理国語】に面白い先生が多かったから、その先生たちの授業をしっかり聞きつつ、H先生が英語の授業で仰っていたことを国語に置き換えて、「この段落は何を意味してるんだろう…」みたいなことを考えて。

あと特編B（新潟高校が独自に共通テスト後に2次対策で行う授業）で、東大や京大の過去問を一人一問担当して、次の授業に黒板に解答を書いておいて、みんなで話し合って、最後に先生があの『プレバト』の俳句の先生みたいに「ここはいりません」みたいに全部消されるっていう授業があって、その授業で色々と理解できた感じがします。

佐：模試の成績を集めると、国語がへこんでる人が多いよね…。

色：僕、国語、今回いけました。

佐：国語得意なの？

色：いや、そんな得意じゃなかったんですけど、なんか点数取れるようになったっていうか、なんか点数落とさなくなったっていうか。

佐：上村さんは国語どれぐらい取ってた？

上：実は、偏差値は国語が1番高かったんですよ。数学・英語はできる人はできるけど、理系の中だと国語はあんまりできる人いなくて。だから、偏差値は高かった。

佐：国語が得意な理系女子だったんだね。

仁：中学時代からそうだったんですけど、理系に進んでるんですけど、基本的に文系なんですよ、彼女。

佐：だって、大学入試でも直前まで物理で苦しんでたもんね。

上：あの…本当に申し訳ないんですけど、得点開示が4月1日にあって、数学があの…120点満点の53点で、どこかのタイミングで佐野先生に謝んなきゃな…と思ってたんですけど。でも、国語は80点満点中の62点だったんですよ。

佐：数学はともかく、東大入試で国語の約8割得点ってすごいな…。

上：国語はずっと得意で、数学がずっと足を引っ張り続けて…。

佐：実は文系だったんだね…。

仁：もうずっと、能開に入った時からそうだったんで。こんだけよく喋る人なのに、あんまり人の話聞かなかったりとか、あんまり問題読まなかったりってことも多かったんですけど、でも、なんか話の内容はちゃんと伝わっているし、問題の内容もちゃんと把握しているんですよ。語彙力もあるし、語学に対しての理解力とかはすごかったですね。

佐：色川君も、いけるんじゃない？ 国語そんなに点数取れてるんだったら。

色：いやあ、まあまそうですね。古・漢文に関しては文法を完璧にすれば覚えたもん勝ちというか、理解してるもん勝ちだと思うので、そこはちゃんとやって、この後、多分文章が難しくなると思うんで、読解のレベルを自分で上げてけば、いけそうな感じが…。

仁：色川君は、再現性っていうのか…習ったことが多少形を変えられようが何しようが大抵できちゃうよね。本質的に1回聞いた説明で、分かったつもりじゃなく、ちゃんと理解できちゃってるんだよね。なんでそうやって理解できるのかは不思議だというか…こっちが伝えたことの本質をパッと理解してしまう。だから、他の人たちよりも圧倒的に少ない時間で問題が解けるようになってたと思うんですよ。

色：ああ…それはあるかもしれない。

佐：でも、そんなこと言われても本人はよくわからないよね、多分ね。

仁：あんな風にできたら誰もが、そんなに勉強時間たくさん取らなくても高校受験でうまくいくと思うんですよ。

佐：何か思い当たる節はないの？「これが原因かな…」みたいな。ちっちゃい時、ひたすらパズルをやってたとか、積木を積み重ねるのに情熱を傾けてたとか。

色：先取り専門みたいな他塾に入っていて、ある程度の計算力は持ってたと思うんですけど…でも、パズル系は好きでした。なんで好きなのかは分からないですけど。さっき出てきた応用力みたいなのがどう身についたか分かんないです…。

佐：ま、確かにそうだよね。才能を持ってる人は「なんでそんな才能があるんですか」って聞かれても答えづらいだろうし、分からないよね…本人はね。

仁：自分で解けないとやっぱり気持ち悪い…？

色：そうですね。

仁：サッカーでも、習ったことが自分一人の力でできないと、できるまではやり続けるとか？

色：いや…サッカーはそこまでじゃなかったですね。練習とか試合を繰り返してただけ…みたいな感じでした。

仁：算数・数学・理科とかでは…？

色：中学の間は分からなくなることはあんまりなかったと思います、多分。

佐：上村さんもそうだろ？

仁：いやいや…算数・数学は、ずっとつまづいてたよね。

上：はい…。つまづいた反動で前に進んでるみたいな。スムーズな日はなかったですね。

佐：え？ それを聞いて勇気百倍の人が結構いると思うけど。だって、小中時代そんな状態でも理三に受かる。

上：最初の点数覚えてますもん。一番最初の通常授業の数学の確認テストみたいなやつ。みんなは90点とか80点とか取ってるのに、私は45点だったか42点かなんかで…。

仁：クラスの中で彼女だけできないって問題とかも普通にあったんですよ。

上：「何言ってんの？」「は？」みたいなのがたくさんあって…。

佐：でも、そこら辺を割り切って機械的に処理できる人が『理系』なんだよね、多分ね。

色：今の話聞いて〈証明〉を理解するのがかなり大切だと思いました。証明問題が解けるっていうことは、本質が分かってるということだと思うし。証明ができるってことは、今まで習ったやつを組み合わせて色々導けるっていう力があるってことで、複雑な問題が出てきても対応できるんじゃないかと思いますね。

佐：まあ、数・英はともかく、2人とも国語が取れてるってのにちょっと驚きましたね。国語ができない原因としてよく言われるのが「本読んでない」とか「新聞読んでない」だけど、どんな感じ？

上：本は好きで、小さい頃から本ばっかりでした。テレビも見てましたが、本の方が好きで、自分で読めるようになった本は自分で勝手に読んでるし、夜寝る前の〈寝かし付け〉で、本を読み聞かせるみたいなのもありますけど、私の場合、逆に目が冴えてきて「2冊目、3冊目も」みたいな感じだったみたいです。親も頑張ってくれて、昔アメリカに住んでた時も日本の絵本を届けてもらう定期便とか手配してくれたりしてたのもあって、ずっと本好きでした。図書館では、名義を父親・母親・自分の3人分を使って30冊を借りてとかやってました。本当に本が好きでした。

佐：30冊…！ どれぐらいの時間で読むの？

上：もう帰りの車で6冊ぐらい読んじゃう…。本当に本読むの好きだったんです。

仁：何ていうか、2人の規格が違うんですよ。色川君はもういかにも理系の国語の解き方で、説問を先に読んで、そこから必要なことを考えていくっていうスタンスが強いんですよ。でも、彼女はまず文章が読みたいんですよ。「まず読もう」って、「何を問われるとか、どうでもいいからまず読もう」っていう感じ。

色：中学の時は全然本を読んでなかったですね…。漫画中心で…。同級生と漫画の話をしても、たまについてきてくれるんですけど、僕ほど読んでる人はいなかったような…。

仁：どんなのを読んでたの？

色：えっと…「ワンピース」「コナン」「呪術廻戦」「推しの子」「アオアシ」とか。

上：「アオアシ」いいよね。

仁：全部王道じゃない？ それら、みんな知ってるんじゃないの？

上：王道ですけど、全部読んでる人は少ないと思いますよ。

佐：読んでる時の感覚は「俺こんなに一生懸命勉強して頭使ってるから頭休めようかな」っていう息抜きの感覚？

色：いや…あくまで娯楽としてで、面白いから繰り返して読んだりしてました。

佐：「じゃあ，そろそろ勉強始めようかな」って、なんか逆の感じ？ 勉強の合間に息抜きでって感じではなかった？

色：はい。勉強の合間にではなく、読むときは集中して読んでました。

佐：頷いてるってことは、上村さんも？

上：母親がすごくまんが好きで、レンタとかのサイトでちょっと読んだのを「よし」って言って、なんかバァーって「大人買い」して、自慢してくるから…。親は「読んじゃだめよ」って言うんですけど読んじゃって。「アオアシ」も読んだし。あと少年ジャンプ。スマホで見れるやつは大体見たし、「キングダム」とかも結構好きで。

佐：え？ よくそんなに時間あったね…。

上：いや、「ない時間」を作り出してたんじゃないですかね。親は認知してないと思いますが、親が買い物に出てる間とかに漫画がある部屋に行って親が買った漫画を…。親はきっとその時間勉強してると思ってるけど、実は私は漫画…みたいな時間が。

仁：上村さん、読むスピードめっちゃ早いっすよ。喋るスピードの感じで読んでみたいな。

上：うん。早いと思います。とにかく読みたいから、そのビャーって読んで。漫画でも本でも。

佐：だって、さっき30冊借りて、帰りの車で6冊ぐらい読んだって言ってたしね。パッと開いて頭に入ってくるの？ みんなの憧れだと思うけど、それ。速読できる人はできるらしいけどね。英語もそう？

上：英語は読むのが速いっていうか、アメリカにいたことがあって、人より英語に入るのがスムースだったから。

佐：何か特別なことをやってるの？ 速読のトレーニングとか。

上：力つけようとかそういう意識では読んでいないですね。英語は中学の頃は「早く早く」って思ってたけど、高校入ってからは急ぐと本質を見落としがちだから、逆に「ゆっくり！」と思ってました。

佐：そっか。本読まなきゃだって。

色：最近は朝読書で…。

佐：朝読書…それって、仕方なくだろ？

色：はい…。

佐：全く読まない…？

色：全く読まないってわけじゃないし、読むのが嫌いなわけでもないんですけど…。ま、スマホが良くないですかね。本とスマホあったら、スマホを手に…って感じです。論理的文章とかはほとんど読まないんです…。あんまり読みたくならないです…。

佐：じゃあ、論理的文章に接するのは、何ヶ月に1回かの模擬試験だけとか、そんな感じ？

色：そうですね…あと学校の授業。そんな感じです。

上：論理的文章はあんまり面白くないっていうか。「新書を読め」とか言われるんですよ。私たちの年は課題探究の先生に「新書を一冊読んできましょう」と言われたんですけど、読めなくて…。「あの…そんな風に論じられても困るな…」ってずっと思ってて…。

佐：でも、それでよく80点中の62点なんて取れたね？

上：2次試験とかの論説文は結構面白くて、色んな文化の比較とかそういうのは読んでて面白いけど、「社会はこう変わるべきだ」とか言われても、ピンとこないし…。時事問題的なものがあんまり読めなくて、学校の論国も最初全然面白くなくて。

佐：高校入試は国語をどれぐらいで乗り切ったの？

色：記述の採点が分からないんで…。でも多分、記述以外全部取れてたと思います。

仁：新潟県の国語は得意の人からしたら不利かも。苦手な人でもまあまあ点数が取れて。漢字の配点が高いし、知識系の問題の配点が高いし、論説だけで小説がないし。理系の人たちは、文章が理屈っぽいので、特に題材が理系の題材だったら、余計興味が湧くし、理系で国語が苦手って人も点数が取れないって印象はないですね。

佐：なるほど。じゃあ、そんなに国語が苦手だからどうのこうのっていう問題はない？ 取れちゃうっていう感じ？

色：今年は特に簡単だったし。古文とか、訳がほぼ書いてあるみたいな…。びっくりしました。

『能開での2人の姿』

佐：じゃあ、ちょっと話の雰囲気を変えて、中学時代の2人の姿を。

仁：本当に対象的な2人です。

上村さんは中1の4月から来て、英語と国語、特に英語がすごく得意だったっていうところと、数学は…算数をあんまりやってこなかったんですよね。

色川君は算数大全とか能開の中学受験算数をガンガンやってきていたんですが、上村さんは他塾で先取りの勉強をしてきたんですけど、応用問題のようなものはやってきていなかったんですよね。中1の時のテストって、算数のところを混ぜてくるテストが多いんですよ。で、数学の「正負の数」とか「文字式」「方程式」だったら解けるんですけど、それ以外のところになったら、みんなが解けても「なんやそれ…？」みたいになってたな。

上：はい…「そんなの知らねえし…」みたいになってました…。

佐：さっきも言ったけど、これを聞いて勇気百倍の人が多いと思うけどな。それでも理三に入れるっていう。

仁：算数をそんなにやってこなかったっていうのは、事実あるじゃないですか？ それは結構不利だったような気がします。後悔は？

上：不利でしたね。もっとやっとけばよかったなと思いました。私、実は中2か中3のときに「算数大全」をメルカリで買ってるんですよ。「このままじゃ、やばい…」と。

それで、「影の長さ」とか色んな三角形がパズルみたいになってるやつとか解いてました。やっぱり、小学校から能開で勉強してる人たちは積み重ねが違うなと感じました。

最難関の1回目がラ・サールの問題だったと思うんですけど、頭でその図を思い浮かべなきゃいけないみたいな問題で。「ここがね、実は三角錐なんだよね」みたいに先生はおっしゃるし、みんなも「ここがね…」とかと教えてくれるんですけど、「そんなの見えねえよ…」って思って…。本当、図が見えてこないんですよね。図形の問題はあまり経験してこなかったんで…。

佐：前に通ってた先取りの塾では図形の問題は取り上げられないの？

上&色：本当に計算だけでしたね…。

上：しかも簡単なものだし。だから結局、後で追い上げなきゃいけない。足りない分。

佐：でも、その計算力だけでもやっといた方が得は得か。

色：そうですね。

上：図形を使わない問題の最後までいけるっていうシステムだから悪くはないんですけど、「図形は出てこない」「確率も出てこない」「ベクトルも出てこない」みたいな感じなんです。

仁：まあ、計算力をつけておけば、計算間違いでバツになっちゃうっていう理由で、数学が嫌いになるっていうことが避けられるっていうところはメリットだなと思うんですけど。上村さんの場合、英語と国語がすごくできたので、相対的に見て数学への苦手意識があったんじゃないですかね…。

上：ありましたね。県立の過去問を解く分にはそこまで苦しい思いはしないけど、最難関の問題とか解いてると、他の教科では戦える相手でも、数学は絶対に無理だ…みたいな思いとずっと戦ってたみたいな。時間かけても、相対的な位置はあんまり変わんなかったから難しかったですね。一番苦手だったし。対応してる理科も苦手だったんですけど。

仁：中学校の時は色川君は「数学が本当できる」っていうイメージが強かったんですが、上村さんに対しては心配しかなかったですね…。だからもう事あるごとに「何か分からないところない？」みたいに声をかけるんですけど、大体返ってくる返答が「いや、いいです」でした。「俺、嫌われてんのかな…」と思ってました。めちゃくちゃ困ってても質問してこなかったよね…？

上：ほぼなかったですね…。

佐：「自分で解決してやろう」っていう意識？

上：いや…そもそも、習慣付けがないから質問しようという発想がないみたいな…。「自分で解こうって思ってる」っていうより「人に聞く」って考えに及んでなかったみたいな…。

仁：2人ともそうなんですけど、先生に聞くより周りに聞くって感じでしたね。色川君も数学で困るってことはなかったけど、何かしら分からないことができても周りの友達に聞く方が多かったよね？

色：そうですね。数学に関しては、「自分で解きたい」っていうより「分からないところなくしたい」だったので、30分かけて分からない問題を考えるよりも、分からなかったら誰かに聞いて「それを理解するのに30分使いたい」みたいな感じでした。だから、中学の時は割と質問してました。

仁：色川君は、数学よりも他の科目の質問がほとんどでしたね。

色：そうですね。英語は文法と単語さえ抑えればどんな問題も基本解けましたし。英語では「これとこれでは何が違うんですか？」「こういう解答じゃ駄目なんですか？」「何でこれが適当で、何でこれは不適当なんですか？」みたいな質問をしていましたね。

佐：この前、もってきた質問もそうだよね。「この方法でもいいんですか？」みたいな。一番いい質問だよね。

色：そうなんですか？

佐：うん。だって、自分なりに違うやり方考えて、「これだと駄目なんですか」ってのはすごくいい質問。そういえば、上村さんもなんかそんな感じだったよね…。俺が授業やってて、解答示すと、大体違う方法でやってたよね…？

上：なんか大体、意味の分からないことしてますからね…私。

佐：うん。なんか他とは違うことをやってた。

上：英語はできるだけいい質問を届けたいと思ったら、やっぱり「自分はこう解いて、こういう風に考えたんですけど、こういう風に考えればいいんですかね」みたいに、「分からないから」みたいな質問はしないようにしてましたね。

佐：H先生の英語の授業の前には必ず、眠け覚ましにエナジードリンクを飲んでたもんね・・・。

上：絶対寝てはいけない！という思いで。最初、コーヒーを試したんですけど、眠くなって・・・。集中してても眠くなるときもあるじゃないですか？ 高校で体力を使い果たしてくるから・・・。

でも、そんな言い訳は通用しないから、うん。「どうにか起きなきゃ」と思って授業開始30分前ぐらいに寝てみるとか、色々やってみたんですけど、最後はエナジードリンクでしたね。

色：最初の授業で寝てしまいました・・・。

上：あ・・・。

色：色々、言われました・・・。一度注意されて終わりかと思ったら、その後から度々その時のことを話題にされて・・・。それで、「もう、これは寝るまい！」と思って、それ以降は寝てないですね。

上：2回とか3回になると、でかい噴火が起こるから気をつけた方がいいですよ・・・。

仁：質問の話に戻ると、普通の人は宿題で間違えた時とかに「これ，どこが駄目なんですか？」と来るんですけど、宿題を終わらせるための質問みたいに感じられるものがあって、「あんまりいい質問じゃないな・・・」と感じることも多いんです。でも、彼らの質問には、宿題終えるとかそういうことよりも、「ちゃんと理解できているかどうか」とか、あやふやだった時に、「ちゃんと解決しないといけない」とか、そんな感じの意識があったんじゃないのかな・・・。

色：そうですね。「こういう風に解決したい」「分からないところをなくしたい」って思いは常にありました。先取り中心の他塾に行ってて、途中から能開との並行になったんですけど、「なんか能開の方が面白いな・・・」「なんかやってることのレベルが高いな・・・」って感じて。計算だけよりも応用させて色んな問題を解くのが面白かったのもあって。上村さんは、どこまで行ったんですか？

上：一応、最終教材が終わったかな。

色：僕は途中の「連立方程式」ぐらいで分からなくなって、「筆算の割り算」みたいなとこに戻ったら、もう分からなくなってて、数学は全然進められずになってしまって・・・。途中から能開に入って・・・、あれ、何の質問でしたっけ？

仁：例えば、最難関の授業で、普通の人は「まあ、自分はそのレベルにいってないから」「最難関受験しないし」「これは分かんなくていいや」って人が結構いたんだけど、分からないことがあった時、「それは嫌だからなんとか解決しよう」とか「できれば、もうその日のうちに解決したい」とか、そういう気持ちが強かったんじゃないのかな・・・。県外受験なんて考えていなかったんだよね？

色：考えていなかったですね。

仁：でも、県外受験用の問題をやったら、それが何の科目だろうが、解決をその場でしようってなるでしょ？ それがすごいなと思って。なんで、そんな風に思えるんだろう？ 上村さんもそうだと思うんですけどね。

そういえば、途中でふてくされてた・・・。

県外受験できないって。

上：ふてくされてましたね・・・。

仁：もう、すごかったですよ・・・。荒れたんですよ。お母さんも困るぐらい荒れて、「なんでさせてくれないん!?」みたいになって。その頃は本人もなんかブスっとして授業受けてて。でも、なんか県外受験の難問になったときには、「解けないと！」とか、そこで別に切れるわけでもなく、そんな姿が2人にはあったなと思って。

佐：「ま、次の日でいいか」とかならなかったの？「次の週までにできればいいか」とか。

色：多分、「なんかいいとこまでできたぞ」っていうのを、最後までやりたかったんでしょうね・・・。

仁：成功体験もあるのかな？ そういう風にやって、できた！っていう喜びとか。

色：多分あると思います。

仁：ちっちゃい頃から、そういう体験を・・・？

色：多分、それは小学生の頃の能開でじゃないですかね・・・。算数とか、新しい発想が色々あって、鶴亀算とか最初見た時は「うん・・・？ どうやって解くん？」と思ったんですけど、解き方が面白かったから、そこが始まりだったかな・・・。

仁：小中の時とか、諦めたくなった時は？「もう、分からな過ぎて嫌だ」みたいな。

上：あるけど・・・実際に諦めるのはまた別の感じ。数学はずっと意味わかんなくて・・・。「テキストの最初の方は解けるのに、なんで後半になると解けなくなるんだろ・・・」とか。「なんでこんなにこの高校のは難しいんだろう・・・嫌だな・・・」とか思うけど。でも、周りは解いてるし、諦めたら私だけ諦めたことになるし、それが嫌で。みんなが解けてるものを解けないのは当然嫌だし、みんなが諦めないものを自分だけが諦めるのも嫌だったし。

仁：例えば「クラスの2、3人だけ解けました。他の人は解けてません」っていう問題は「解けなくてもいいや」となる？

上：いや、思わないですね。だって、解けてる人がいるんだから解かないと。1人でも解けてたら「自分も解かないと！」と思います。

仁：色川君も、一緒？

色：数学の場合は、同じように考えちゃうと思います。でも、国語は無理です・・・。数学だけですかね・・・「絶対解いてやる！」みたいなのは。

『能開で「人として」成長』

仁：2人とも勉強以外にもね・・・中学3年間で、途中でグッて成長した時期があったんですよね。人としてというか。

上村さんは中1の途中から一気に周りと話すようになった。最初は、上村さんには誰も知り合いがいなくて「ぼっち」だったんですよね。 それが、半年後には彼女が「中心」なんですよ、クラスの。なんであんなに急にみんなと話せるようになったんだろう・・・って。みんなもすごく慕ってたし、なんであんなに急に打ち解けられたのか・・・。

上：最初は、みんながいっぱい話しかけてきてくれて、中学で演劇発表会があって、先生が「ちょっと見に行こう」と言って、見に行った時、附属の人たちが「おーい」って声かけてくれて、そんな感じで話すようになるまでそんな時間かからなかったかな。あと、隣の人との

交換採点の時、女子の細かいコミュニケーションってあるじゃないですか…100点だったらキラキラつけるみたいな。そういうのが、楽しくてやってたら、ちょっとずつ仲良くなってったみたいな。

仁：上村さんの、この学年の女の子とかは、自分より先に相手が解けても、全然ギスギスしなかったんだよね。

上：本当に大人で、みんなが。女子同士じゃ、嫉妬・妬みみたいなのはなかったですね。

仁：そういうの、男子にはあったの…？

上：男子は…。妙にストイックな人もいて…。尖ってましたね…。

仁：なんかもう、分からないことがあると、もうすぐに「私は全部解けるように、できるようにならないといけないんだ！」っていうのが、途中から急に大きくなったというか。でも、分からないことが段々減っていったのも確かだよね。

上：なんか減ってきましたね。確かに。

最初は全部分からなかったから、全部分かるようにって「加点方式」だったけど、数学が中学っぽくなってくると同時に、逆に分からない問題が目立ってきて、「じゃあ、分からないところを潰していこうか」みたいな減点方式になって。

仁：途中から数学の授業の時に、自信が出てきてる感じがして、中1の時なんかは、「私に当てないでくださいオーラ」が出てて、「私、無理ですから」って感じで授業を受けてた印象があったから。いつから自信持てるようになったの？ 数学は苦手だったかも知れないけど、自信は出てきたでしょ？

上：自信っていうか、「意外にそれほど置いてかれてるわけじゃないな…」となった時期があって、「もうちょっと頑張ったらみんなに追いつけるかも…」となってました。

仁：中1の時は、クラスの中では「できない子」っていう位置づけで…。私が座席を決めるときには、上村さんは一番前にしてました。でも、中2途中ぐらいからは「もう後ろの席でもいいかな」みたいに思って、あんまり心配じゃなくなったというか。

上：学校の進みが遅かったのもあったのかな。図形を中学でちゃんとやってからは、中学の範囲はできるようになってきて。勉強自体するようになったんじゃないですかね。中1はあんまり勉強してなかった…。

佐：高2の夏休みぐらいからだけど、高校部では受験演習に入ってから何問ぐらいやったっけ？

上：400問以上やってますよね。

佐：沢山やってきたよね…。ああいう数学の大学入試の問題、どんな感じで映ってた？

上：算数よりはましかなって…。

佐：ああ…。やっぱり算数はむずい？

上：算数はできなかったですね…。ずっと未習だったんで、算数だけ。

仁：やってなかったですね。中学受験の算数を一切、彼女は…。

佐：逆に、ああいう難易度の高い大学入試問題の方がやりやすい？ とっかかりやすい？

上：図形の問題でも、座標に落とし込めるじゃないですか。そうなってからは「よっしゃ！算数もうないやん！」と思った感じですかね。

佐：使える道具が多くなるからね。大学入試になるとね。小学校では道具がないもんね。

仁：対する色川君は、もう最初は自由人っていう印象が強くて。

色：え？ そうなんですか？

仁：ちゃんとやるんですよ。ちゃんとやるんだけど、マイペースで我が道を行くっていうか。芯がしっかりしてんだろうなっていうのはあって、あんまり他の人にどう思われるか、あまりビクビクしてないというか。「自分のことをしっかりやっていれば」っていう気持ちが結構強かった。それが、どんどん変わっていったんですよ。

あるエピソードがあって、入試の倍率発表の日のこと。それを知ったとき、あまりにも嬉しくて、お母さんに面談の時に伝えました。

彼は自分で解けてしまい、質問・相談もほとんどなかった。そんな彼が中3の倍率発表の日に初めて「相談があるんですけど…」ってきたんです。びっくりしました…。だから、こっちも「何を相談されるんだろう…」って不安になったのを覚えてる。覚えてない？

色：覚えてないです…。

仁：彼が言ったのは、倍率を見て自信なくして、「この自分の志望に対してこのままでいいんだろうか…」と悩んでる友達がいて、「その友達にどう声かけたらいいのか、どういう風に接したらいいのか」って相談でした。「色川君がこんなことを考える人になってくれた…」っていうので嬉しくて、その後の三者面談でお母さんに話したら、お母さんめっちゃ泣かれてたよ。

色：確かに言ったな…。思い出してきた…。

仁：彼は優秀だったんで、周りからしたら、彼から励まされても嫌味にしか聞こえない。「お前はいいよな…」っていう感じになっちゃう。だから、どうすればいいか当然悩むというか、どう言ったらいいか分からなくなるっていうことをすごく悩んでたみたいですね。

佐：まあ、そういうのは高校入試特有の心配というか、倍率が1倍台という。大学入試では、3倍4倍が当たり前だから。だから、心配するも何も、高すぎて「心配してもしょうがない…」ってなるからね。

仁：そう、そう。高校入試は倍率が低い分、よりリアルなんですよね。

上：高校入試って、みんな基本的には同じ会場にいるじゃないですか。そんな中で倍率とか考えたとき、「友達はこう」「自分は…」みたいな、よりなんかこう「人間関係」っぽくないですか？ だから、多分大変なんですよ。

佐：そうだね…。大学入試は全国区だから、敵・ライバルの顔が見えない…。だから、比較的気持ちは楽…。

上：能開には私の中学から来てる人は多くなくて、呑気にしてたけど、附属の人たちは「何倍だって…」みたいな話をしてましたね…。

仁：そういうのもあってなのか、本人は分からないと思うけど、色川君に憧れてる同級生もいて、「色川君みたいになりたい」「色川君を尊敬してます」と言ってる人もいました。彼らは「勉強もできて…サッカーもできて…」みたいな表面を見ての尊敬でしたけど、中3の後半ぐらいからは、私は心の中で「それ以上にすごいところが彼にあるけどね…」って思ってましたよ。

佐：どうする？ こんなに持ち上げられて。

色：ここは絶対に載せましょうね。

仁：だから、総代になったと聞いた時には、同級生は嬉しかったんじゃないかなって思いますね。「俺たちの色川君が選ばれたぞ！」って。

『能開って…？』

佐：能開は生活の中で、どんな位置付け？

色：まあ、生活の一部。

中学校の時は部活がそれほどきつくなかったんで、放課後はもう能開行って、そして、何時に家に帰って、みたいにほぼルーティン化されてて、そういう意味で日常の一部でしたね。

佐：上村さんは？

上：印象は中学部と高校部で違うんですけど…。

小学校の頃は、できない、分からないってことがあんまりなかったし、「自分は意外と勉強できるのかもな」なんて風にも思ってたけど、中1で能開に入って「自分はこんな低い点取って何をしてるんだ…」みたいに感じて…。「自分はあんまり勉強できないのかもな…」っていう現実を突きつけられて、それが嫌で、最初は能開もあんまり楽しくなかった…。知らない人ばかりだし、先生にも授業以外の質問もできず…。私、多分中2の終わりぐらいまで能開のトイレがどこにあるかも知らなくて…だから、能開に長いこと滞在できなかったんですよ…。玄関から教室に直行して、授業が終わったら帰るだけって日々を過ごしてたから…知らなくて、周りに何があるのか。

それが、中1の秋ぐらいから、他の中学の人たちが話しかけてくれるようになって、女子とは喋れるようになりましたね。それで、しばらくしたら学校よりも能開の方が楽しくなって。能開には、話が合う人もいっぱいいるし、授業も面白いし。だから、能開に行くために学校に行かなきゃいけない…みたいになってました。

加えて、中3になってコロナの影響でリモート授業が増えて「行きたいのに行けない…」状況になって、余計に能開が恋しくなったというか、存在が大きくなりました。

高校部は、中学部からエスカレーターみたいな感じで行って、他塾の方にも、やっぱり理科がどうしても苦手だったから「先取りしなきゃ…」で行ってたんですけど、なんか機械的だなと思ってて、能開の方が「一対一」感が強いというか、それが良かったです。

H先生の授業では「こんなに面白い英語も世の中にあるんだな」と感じたし、数学も学校だとつまづくことはあまりなかったけど、能開だとつまづくし、中学部と同じで自分ができないことが見えてくるのは能開だな…と思って、「せっせこせっせこ通って3年間…」って感じでした。

佐：上村さん、最初の高1春期講習から最後の高3冬期講習まですべて参加してくれたよね…。

上：数学はアメリカ研修の時に休まざるをえなかったですが、それ以外は休んでないです。

佐：正直なところね「東大を受ける！」って聞いた時に、能開の夏期・冬期の講習を受けるよりは、首都圏の大手予備校の講習ってのも経験してみた方がいいんじゃないかと…、実際に東大を受験する人たちの中で勉強して、刺激受けるのもいいんじゃないか…と思って、そっちも勧めてみようかなと思ってた。でも結局、最初から最後まで能開の講習もずっと参加してくれた…。非常にありがたかったし、嬉しかったな。首都圏の大手予備校の講習に参加しようとか考えなかった？

上：県外受験をしなかった段階で、県外とは決別したというか…、最後の時だけポンッと行くよりは、自分は基本的にギリギリまでホームの方にいたいな…と。

仁：高校受験の時は全く逆で、これ色川君もそうだと思うんですけど、2人ともギリギリじゃないっていうか、危機感はそこまでなかったと思うんですよ。正直、落ちるかも…って危機感はあった？ それほどなかったでしょ…？ でも、モチベーションも下がることなく、もっと上へ！って努力できてた。なんで、そんな風にできるんだろ…って思ってました。「合格ラインにも達しているし、こんなもんでいいかな」みたいなのはなかった？

色：多分、理由は二つあって、ギリギリじゃなく、余裕をもって入りたいなっていうことと、もう一つは、さっき上村さんも言ってたんですけど、分からないことの方が少なくなってきてて、そのあと10％ぐらいを分かっちゃいたいし、理解しちゃいたいなっていう思いで。100％にできる限り近づけたいみたいな。

佐：負けず嫌い？ 貪欲さ？

色：どっちもあったと思います。

佐：多分、2人ともそうだよね。もうおそらく合格は大丈夫で、そんな中で、勉強に対するモチベーションを維持するって言ったら、貪欲さや解けない悔しさがないとね。

上：「周りはもっと勉強してるし」「みんな自習室とかで勉強してるし…」みたいな。コロナの影響で、ほぼ外に出てなくて、「おそらくみんな、私の見えないところで私と同じぐらい頑張ってるんだろうな…」と思って、「能開のみんなと同じぐらい頑張って、同じ高校に行きたいな」って思ってました。

『進路』

佐：結構長時間になってるけど、喉、大丈夫？

上：いや、この程度喋るぐらいで喉が渇くような人間ではございません。

仁：喋るの好きだよね…。ずっと喋ってたイメージがありますね…。

佐：上村さんは、その「喋り」を生かして、指導者の道へ、どう？

上：分からないですね…本当に、分からない…。喋るの好きで得意だったら、人を導けるかっていったら、そんなこともないだろうし。

佐：書くのも好きだよね？

上：なんか文字書くのが、好きなんですよね。メモ取るのとかも結構好きだし。

佐：相手に何かを伝えることが好きなのかな？

上：相手に伝えるってよりは、自分でアウトプットしたいだけで、相手が受信するかどうかはあんまり気にしてなくて…。だから、早口なんだと思うんですけどね…。

佐：色川君は、あまり口数多い方じゃないよね？

色：うーん。まあ、時と場合によりますけど、多い方じゃないと思います。

佐：息抜きは、ひたすら漫画？

色：いや、サッカーもしてましたし。あとは、それほどでもないですけど、スマホかな…。それほど話すのは好きじゃないんですけど、コミュニケーション取るのは好きですね。

仁：家の環境的に好き勝手に喋れないよね？

妹と弟が結構やり合うらしく、お母さんによると、色川君がいつもそれを調整してるらしいんです。だから、お母さんの今の一番の心配事は、兄が大学に進学して、一人暮らし

になって、家からいなくなったら、色川家は崩壊してしまう…ってことらしいです。

佐：もしかして、政治家向き？

色：いやあ…最近のニュースとか見ても、政治家にはなりたくないですね…。

佐：そういえば、そろそろ「メディカル・コース」「サイエンス・コース」の選択だね。上村さん、何かアドバイスない？

上：私は医学部志望でしたけど、サイエンスを選びました。メディカルは高2の夏の研修が病院の見学みたいな感じなのに対して、サイエンスは筑波での2泊の研修で、ちょっといい感じの旅館に泊まれるんです。JAXA(宇宙航空研究開発機構)も見学できるし。先生方もサイエンスの人たちには「数学が好きな人たち」みたいな先入観を持って数学を教えてくれるから、難しい問題に接することもできるし。医学部志望でもサイエンス選ぶ人も多いですよ。

佐：メディカルを選ばないと、そこで医学部受験がなくなるっていうわけではないんだよね。

上：メディカルは講演会が医療系に限定されるのに対して、サイエンスはJAXAの人とかが来てくださって、話題の範囲が広がる。あと、メディカルは先生もちょっと厳しいらしい…。「お医者さんに最後この感想を出すんだから、ちゃんと書いて」みたいなことも言われるらしいし。

佐：メディカル志望の人が多い？

色：男子の話しか聞かないですけど、サイエンスの方が多いですかね。

上：女子はメディカルが多いかな。女子には医療方面に進みたい人が多いから。「物理とかちょっと…」って、サイエンスから離れる人も多くて。

佐：でも、上村さんは「物理はちょっと…」って側の人だったんじゃないの？

上：苦手でしたけど、嫌いではなかったです。講演を聞くのとか好きだったし。

佐：上村先輩の話を聞いて、もうサイエンスに決まりみたいだね。

色：そうですね。はい。

佐：そして、上村先輩を追って、東大受験かな？

色：いや…それは、まだ…。

佐：上村さんが「理三へ」となったのは直前だったよね？ 東大へって意識は、ずっとあった？

上：意識はあったんですけど、理一と理三で悩むのって、実はあんまりか良くないんじゃないか…みたいにずっと考えてて…。「医師になりたいんなら、科学大（東京科学大・昨年までは東京医科歯科大）とか新大の医学部で迷うべきなんじゃないの」みたいな。それで、理一と理三で悩ませてもらえたのも、親の理解あってのことだと思うし…うん。

佐：色川君は、まだ完全に半々って感じ？

色：サイエンス系だと、将来何になればいいのか…あんまよく分からないので…。まだ、情報が足りないです。

佐：サイエンス系の「その先が曖昧だ…」ってことが魅力的だって人もきっといるよね。これからどういう風に自分の進む道が変わっていくかっていう方に魅力を感じる人もいるよね。先が分からないから面白いっていう感じで。医学部の場合、もう大体、道が決まっちゃうからね。

上：東大理一に合格した人はシンフリ（「進振り制度」1年生と2年生の途中までの成績を元に、3年生からの進学先を決めることができる制度。東大の「リベラル・アーツ教育」の一環で、入学後、いきなり専門分野に囚われることなく、興味を持ったことは何でも広く学ぶことができるようになっている。）もあるし、東大なら、どこに進んでもギリギリまで迷えるし…みたいなことを言っている人もいました。

佐：時間が経つの、意外と早かったよね？ 高校3年間なんてあっという間じゃなかった？

上：気づいたらなんか終わってましたね。

佐：だから、あんまり悠長に考えてると…。

上：進路について考える時間はたっぷりあると思うんだけど、振り返ってみると、真剣に考えてる時間は少なかったかな…。色々あるからね…。青陵祭（体育祭）もあるし…。

佐：行事とか、一生懸命やる人だったっけ？

上：高校では結構一生懸命やってましたよ。

佐：色川君はどっち派？「行事なんて適当にやろう」か、それとも「燃え尽きよう」か。

色：どっちでもないかな…。真ん中ぐらいじゃないですか。

上：私も別に「燃え尽きよう」とまでは思ってなかったです。これぐらいが一番楽しめるかな…って程度で。

佐：あと、今後はどんなことがあったっけ？

上：理数探究がきついかな…。きついっていうか、論文書くっていう、自分たちでテーマを設定して実験したりとかするものがあるんですけど、大体望むような結果は得られないし、時間も少ないし…で。「ちゃんと成績がつくからね」って脅かされながらやってました…。

佐：でも、ちゃんとやったら面白そうだけど。

上：私たちの時は、あんまり設備が…。でも、3Dプリンターが入ったみたいだから、活用できたら面白いかも。あとは…青山祭かな。私の時はコロナで、2年間ぐらい適当な感じだった…。

迫りくるテストをうまいことかわしながら過ごせば…。

佐：そうか…高校生はやっぱりテスト中心に回っていくか…。

上：そうですね…。そうなりがちです…。

佐：じゃあ、適当に息抜きをしながらテスト中心の毎日を…だね。息抜きは漫画？

色：漫画、最近はあんまり読まないですね。

佐：じゃあ、何？ 映画？ 音楽？

色：時間ないっす…。勉強と部活で…。

佐：ああ…部活ね。「高校に入ったら、部活したいけど大丈夫かな…」と思ってる人もいると思うけど、何て答える？

色：新潟高校の場合、部活はゆるめだと思うので、大丈夫だと思うけど…。多分いけると思いますよ。ただ、野球・ラグビーはやばいかも。朝練（朝練習）もあるみたいだし。あと、ボートも大変そう…。

佐：でも、やるべき？

色：はい。やれるんならやるべきだと思います。

佐：上村さんは勉強ばかりだったっけ？

上：部活…ほぼ行かなくてもいいみたいな部活だったんで…。ただ，科学の甲子園があったから、その勉強とか実験の練習したり。本当、行事が次から次へとどんどん来るから、2年生

の女子はダンスに結構時間が取られる…。遊びに行ったりもしてました。

佐：え？ そんな時間なんてあったの？

上：能開の日じゃなくて、他に用事がない放課後が他の人と重なったら、ちょっと万代行くとか、ちょっとコンビニで喋るとかしてました。

佐：息抜きは必要だよね？ 息き抜きの時間はつくらないとね。

上：はい。なんか、勉強だけしてると本当に世界がなんか偏っちゃって、つまらないことになりそうだなって思います。

佐：これから勉強がどんどん難しくなって…。でも、色川君はそういうの好きそうだね。

色：はい。好きだと思います。

佐：もうちょっとの我慢だね。能開の今のクラスだと、高2の冬期講習辺りで3年間の数学が全部終わるから。だったよね？

上：そうでしたね。

佐：今はまだね、道具を揃えてる状態だけど、その後の入試問題の演習になったら、問題をたくさんやって、面白いと思うけどね。

色：途中でその道具を落とさなければ、多分。道具を落とさないのは得意だと思います。

上：能開で習うタイミングで大丈夫かどうかは別として、高校が後から追いついてくるから、最低でも2周はするわけで、道具を落としてしまっても、拾い上げる機会もあるわけだし。数学が好きなら大丈夫ですよ。

佐：それが能開で予習をする利点だよね。能開で予習して、その時は100％ 定着してなくても、後で学校でやり、そして、定期テストの勉強やり、で、固まっていくから。

そろそろお開きの時間かな…。後輩たちへのアドバイスとかをちょっと。能開の使い方みたいなのを後輩たちに。

『後輩へ … 枕は必須！』

色：鉄人カード。

佐：必死に集めた？

色：そうですね。福引券さえ手に入れられれば…みたいな感じでした。

佐：何？ その福引券って。

上：私も分からないです。あそこに貼ってあるあれですよね。

仁：ポイントが集まるとガラガラっとして、それで何がもらえるか決まるっていう。

佐：それ、モチベーション？

仁：結構、色川君の学年は。

佐：試験の際に持参した方がいいものとか、緊張への対処法とか。

色：緊張はしましたけど…まあ、周りに知ってる人が多かったので…。まあ、「とにかく勉強していく！」ですね。

佐：そうか。勉強して自信つけるしかないか。上村さんは？

上：大学受験の時、母親が色々頑張ってくれて、歩いて行ける所にホテルをとってくれたり。あと、これは母に「絶対に話してきなさい」って言われたんですが、でっかいスーツケースに私が普段使ってる枕と加湿器を入れてくれました。

「あなたが寝れたのは、私が枕を持ってったおかげよ」って言われました。「枕」大事らしいです。

普段通りのリズムで生活できるようにしてくれて、受験前何ヶ月かぐらいは、起床時間・就寝時間も固定してたし。

当日は緊張したけど、学校で配られたプリントとか見たり、能開の先生方が書いてくださった寄書きを写真に撮っていって、それを見てました。ごうかく君も付けていったし。あとは寝たふりして、周りのザワメキは無視するようにして。

佐：それにしても、理三を受験する人たちに必要なものってやっぱり、実力が必要なのはもちろんなんだけど、勇気だよね。

上：押し切る力、みたいな。

佐：定員が98（推薦入試の定員を除く）か…そこを受けようというね。

上：確実な人たちがいるのも分かるんですけど、ほとんどの人がそうじゃないから…。そんな中で、「自分が出願する側になるのか、しない側になるのか」とか「後期どうしよう…」とか「もう一年となったらどうするのか…」とか、色々頭の中を駆け巡るんですが、それらを一旦置いといて、「とりあえず受けよう！」っていう思い切りが。

佐：「理三なんだから、もう浪人して当たり前！」ぐらいの開き直りで受けてる人が多いよね。

上：みんながみんな合格しても、入るわけじゃないんで、意外と。

佐：そうらしいよね…受験マニアの人とかもいるらしいしね。

上：そう。そういう人もいるから、あんまりその受験会場にいる人みんなを、自分と同じ受験生と見ない方がいいかもしれませんね。

佐：じゃあ、特に緊張感でガタガタ震えてた…とかではなかったんだね？

上：もうここまで来ちゃったらもう受けて帰るしかないし。受けないと帰れないし。

佐：開き直り。

上：はい。当日、会場では「早く試験問題配れよ」と思ってました。周りもそんな感じでしたね。とにかく、先を見るしかないから。

佐：枕はずっと決まってるの？

上：はい、決まってますね。

佐：東京での独り暮らしにも持って行った？

上：同じのを母が2個買って…。

佐：そんなに拘りがあるんだ…。

上：低反発の超分厚い枕じゃないと納得がいかないんですよ。薄っぺらい枕、あんまり好きじゃなくて。できるだけ頭を高くして寝たいから。

色：割と分かります。

佐：そうなんだ。

色：拘るってほどでもないですけど、頭が低いのは嫌です。

『家族 … 感謝』

仁：色川君の家族との関係性…良かったな…。講習の時とか、結構早くに来ても車から降りてこないですよ。何してんのかな…と思ったら、ずっと話してるんです、車の中で。親子でなんかニコニコ笑いながら喋ってて。そして、直前になってようやく降りてくるみたいな。

色：そうですね。家族みんな仲がいいですね。同じ漫画とかも読むし。

佐：上村さんは、そんな長時間お母さんと一緒にいたらずっと喧嘩…？

上：いや、実は仲はいいんですよ。似てるんで。同じ土俵なんですよ、ずっと。

佐：「こんなことに気を遣ってくれた」とか「こんな風にしてくれて感謝してる」とか、特に受験前とか、何かある？

色：受験に集中しないっていうか…。

佐：ああ、極力普通に過ごせるように気を配ってくれてた感じか。

上：なんか、もっと色々感謝した方がいいんでしょうけど…。能開への送迎とかも6年間ずっとでしたし。

特に中1の頃とか、弟もまだ小さくて、手もかかるだろうに、「よくもまあ、こんなに来てくれるな…」って思ってました。

小中学生の頃は勉強も教えてもらったし。他塾の認定試験に受からなかった時とか、親が1回全部見てくれて…なんか、いつも同じ土俵で、同じところにいてくれるって感じでした。

大学受験前日に「入試会場の下見に行こう」って言われて、私が「いや、そんな時間はない」と言ったら、母一人だけ行ってくれて、ぐるぐる回ってきて、色んなところで写真を撮ってきてくれて、「今なら私が完璧にガイドできるから、もう1回行こう！」と結局連れ出されて…。いつも同じところで、同じものを見てくれているから、それがありがたかったですね。

父は、送迎とかお弁当とか、細かいことをしてくれたし…本当にありがたかったです。

仁：挫けそうになったり、諦めそうになったりした時、どうやって脱却を？ そんな時、何が支えに？

色：親はもちろん支えになったし、辛い時とか。あと、レベルの高い友達がいる、そんな友達と勉強できるっていう状態にあることが一番のモチベーションでした。「こいつができるんなら俺もやる！」みたいな感じで。

佐：上村さんは？

上：高校受験は、両親の存在・一言がやっぱり大きかったです。母からの「あんたは妥協すると後でめっちゃ後悔するし、自分より凄い人がいっぱいいる場所じゃないと、すぐつまんなくなっちゃうよ」って言葉も記憶に残ってます。

挫けそうな時には、自分で立ち直っていたわけじゃなく、がっつり一度挫ける派だったです。最大限落ち込んで、「もうやるしかないか…」って思うまで。

親友達は高校の時もずっと支えてくれてたし、特に友達はみんなも進路で悩んでいたから、いっぱい話したりしてましたけど、最後は、「自分が歳を取ったとき、後悔がない方がいいな」「一回挑戦してみるってのもいいんじゃない？」みたいに自分で納得して。

佐：では、こんなところで。ほんと、長時間に渡り、ありがとうございました！

『対談を終えて』

新潟校
仁村　信哉

上村さんを初めて授業で受け持ったのは、中学1年生の時でした。当時は全くしゃべることがなく、おとなしく淡々と学習している子でした。そんな上村さんがいつの間にか周囲の子たちと打ち解け、中心にいました。これは彼女自身の人としての魅力がそうさせるのではないでしょうか。上村さんといると、周囲の子たちも、いつの間にか何かに一生懸命に取り組むようになり、面白そうにしています。気が付くと、みんなが何かに一生懸命になっているのです。いわゆる「巻き込む力」があるのだと思います。

色川君を初めて授業で担当したのは中学2年生の時でした。物静かで我が道を行く、良い意味で自由な人という印象でした。当初は他人にはそれほど関心がなく、自分が取り組むべきことに一生懸命になる子に思えました。もちろん、それだけでも素敵ですが、いつの間にか周囲の子に対して気遣いができる子になっていました。印象的だったのが対談でも話した、高校入試の倍率が発表された日のことです。自分のことにしっかり取り組むだけでなく、周囲の人のことを一生懸命考え、時には助けを求めることもできる素晴らしい人間になっていました。

2人に共通していることですが、何事にもひたむきに取り組み、他者への敬意を持ち、感謝の気持ちを持っています。こういう人は、周囲からの信頼を得られ、周囲の人も勝手に寄ってきます。上村さんも色川君も結果を出しているから人が寄ってきているのではなく、そういう人だからこそ信頼され、周囲の人も寄ってくるのだと思います。もちろん、結果を出しているのもすごいのですが、「こういう魅力あふれる人だから結果を出せる」とも言えると思います。

対談を終えて感じたのは、「この人たちと、もっともっと話をしたい！」という想いでした。本当に魅力的な2人です。これからどんな大人になっていくのか、本当に楽しみです。

『対談を終えて』

白山駅前校　高校部
佐野　雅人

会話の中に「要するに」「要は」「とにかく」が多く出てくる人は、相手を下に見ていて、無意識に〈上から目線〉で話をしている人だ、と聞いたことがある。

そう言われてみると確かに、これらの言葉には「普通に言ってもお前には分からないだろうから、簡単に要約するとな…」「長々と説明しても、どうせお前には伝わらないだろうから、手短にまとめるとな…」という意識が含まれていると感じられなくもない。

今回の総代対談、長時間に渡り、三時間近くになった。その中で、総代2人の口からは一度もこれらの言葉が出なかった。それぞれの受験で頂点に立ったといってもいい2人であるにもかかわらず。こんなところに、2人の性格・性質が現れているような気がした。

上村さんは、知らず知らずに他校の生徒たちを惹き付け、気付いたらクラスの中心的存在になっていた。色川君は、他人を思い遣る優しさを育み、周囲に尊敬・憧れを抱かせる存在になっていった。

「要するに」「要は」「とにかく」を一度も発しなかった2人は、今回の対談で、これらのことを十分に証明してくれた。

彼ら2人の担当者として、嬉しかったのは、「2人とも能開で成長できたんだ」と感じられたこと。「2人とも能開をモチベーションを高めてくれるところ」と感じてくれていたこと。

能開が彼らのモチベーションを高めたように、上村さんは私のそれを高めてくれた存在だった。そして、色川君は私のそれを現在高めてくれている。

彼らだけじゃなく、今まで能開で学んできてくれた人たち、現在学んでくれている人たち、彼らへの感謝を思い起こさせてくれた貴重な時間だった。